I

概説…近世の茶の湯……………	熊倉功夫
一 茶の湯における近世……………	3
二 政治性の喪失と社会性の復活……………	6
三 家業化する茶の湯……………	10
四 遊芸化する茶の湯……………	14
五 近世家元制の確立……………	17
六 遊芸化批判と新しい茶の湯……………	21

II

利休七哲……………	八尾嘉男
一 「利休七哲」の顔触れの変遷……………	25
二 利休没後の茶の湯をリードした茶人……………	44
千宗旦と三千家の成立……………	原田茂弘
一 千宗旦をめぐる史料と宗旦像……………	53
二 三千家の成立と利休の茶の湯の継承……………	61
三 宗旦の茶の湯の交流……………	75
小堀遠州と片桐石州の作意……………	中村利則
一 「遠州好み」ということ……………	82
二 密庵席……………	85
三 伏見六地藏屋敷……………	91
四 江戸屋敷と大坂屋敷……………	96

五	伏見奉行屋敷	99
六	石州の京都屋敷	109
七	石州の小泉屋敷	114
八	石州伝書	118
元禄時代の茶の湯		
一	利休没後一〇〇年	124
二	大衆化する茶の湯	134
三	大名の茶の湯	144
千家茶の湯の広がり		
一	利休茶の湯の正統	156
二	千家茶の湯の展開	162
三	一燈宗室と直斎宗守	170
四	速水宗達の茶とその拡大	175
	堀内國彦	
	谷端昭夫	
	木塚久仁子	

茶の湯の地域的展開……………山田哲也

一 支配階層における茶の湯……………183

二 被支配階層における茶の湯……………203

III

煎茶の理念と表現……………佃 一輝

一 漢学と漢文学的世界の表出……………211

二 煎茶会の表現……………226

茶の湯の名物記……………矢野 環

一 名物について——文献学的研究……………242

二 『君台観左右帳記』……………247

三 茶の湯者の時代から大名の時代——天文名物記から柳営御物……………249

四 道具商の時代から博物館の時代……………253

五 名物記研究の精密化……………258

多様化する茶陶文化……………筒井紘一

一 茶陶の諸相……………266

二 茶会記にみる茶碗の推移……………271

三 香合にみる中世と近世……………286

茶室論……………日向進

一 草庵への歩み……………301

二 茶室の床……………310

三 市中の山居と露地……………315

四 茶室空間の聖性……………320

IV

近世茶の湯研究の手引き……………谷端昭夫

一 全集・通史……………327

二 一七世紀初頭——新たな茶の形の創出……………328

三 一七世紀前半……………329

四	一七世紀後半	各地への茶の普及と再編	332
五	一八世紀前半	地域的な核の展開	334
六	一八世紀後半	流儀化と普及	335
七	一九世紀前半	地方の時代	336

参考文献

執筆者紹介

概説・近世の茶の湯

熊倉 功夫

一 茶の湯における近世

日本史における近世にはいくつかのメルクマールがある。一つは社会経済の制度である石高制である。第二は政治制度の幕藩体制であり、第三は商業流通の制度である鎖国制である。この三つの制度は同時にはじまったわけではない。石高制はすでに桃山時代にはじまり明治九年（一八七六）の秩禄処分まで続いたとみるならば、近世は一五六〇年代より明治初年までの三一〇年余といえる。幕藩体制は慶長八年（一六〇三）の開幕より明治元年（一八六八）の藩籍奉還までのいわゆる江戸時代二六五年間となる。鎖国制は寛永一六年（一六三九）のポルトガル船の渡航禁止から安政元年（一八五四）の日米和親条約締結に至る二一五年間である。このように石高制の上に幕藩体制が、さらにその上に鎖国制が乗って近世が形成されたので、三つの制度が重なった二一五年間こそ、近世が近世らし

さを最も強く保った時代といえる。しかし実態としては、寛永時代に至って近世文化の色合いは明確となり、黒船来航より半世紀くらい前に近代文化が萌芽している。その間が文化における狭い意味での近世である。

天正一九年（一五九一）の利休切腹をもって戦国的な下剋上の茶の湯の終焉とするならば、近世的な茶の湯の創始はここよりはじまったといえよう。利休七哲の時代は、下剋上の茶の湯の残響と近世的な茶の湯の胎動とが相克する時代であった。はじまりは利休切腹として、ではいつ近世の茶の湯はかげりをみせるのか。茶の湯人口が拡大し、地方都市町人や豪農レベルまで茶の湯が浸透するという活気をもせた一九世紀の初頭に、近世的茶の湯にかわる近代が現出した。

遊芸化した茶の湯批判の高揚、批判者としての煎茶家の登場という点から考えると、天明・寛政年間（一七八一〜一八〇一）ごろを一つの画期と考えたい。まだまだ近世的茶の湯は隆盛をきわめているのだが、むしろ近代茶の湯に多大な影響を与えた松平不昧などの茶の湯の出現に注目する必要がある。こうした視点をもちつつ、本巻では幕末の茶の地方的展開まで追跡することになろう。

さて近世的茶の湯の出発はいかなる様相を呈していたのだろうか。利休没後、豊臣秀吉はいささか茶の湯に興味を失い、能楽に夢中になった。そのためか、次代を担う古田織部の活躍が目立つようになるのは慶長三年（一五九八）以降である。

慶長という時代（一五九六〜一六一五）は戦国的な下剋上の精神と近世的な秩序社会形成の政治と

が激しく対立した時代である。実力本位に成り上がる可能性を断たれた若者たちの間に厭世的な気分がただよい、それが反社会的な行動や風俗として表出したのが慶長時代の特色であった。まともならざる若者たちは「かぶき（傾いた）者」と呼ばれ、異風異体の風俗と行動が人目を引いた。彼らかぶき者の風俗を舞台にのせて踊りに仕立てたのが、出雲阿国が創始した歌舞伎踊りで、幕府が開かれた同じ慶長八（一六〇三）年に京都北野天神の境内に登場している。

こうしたかぶき者の流行は、当時の風俗を描く洛中洛外図の恰好の画題で、派手な紋様を染め出した衣装をまとい、大たぶさを結び、尻端折りしっぽじりをして長大な刀をさす若者たちの喧嘩が必ずといってよほど描かれている。

新しい江戸幕府のもとに編成される幕藩体制に押しつぶされ、かぶき者として生きる人びとの中には関ヶ原合戦に敗れて禄を失った牢人も含まれていた。それ故にかぶき者の存在そのものが反幕府的な危険な集団と幕府からみられたのである。慶長時代の後半は熾烈なかぶき者弾圧が行われ、まともならざる異風異体の美が排除されていった。

利休の自刃が下剋上の茶の湯の否定であったとするなら、かぶき者の否定が、異風異体の美を包含する古田織部の自刃である。それはちょうど慶長という年号が終わる年のことであった。

異風異体の風俗が排除されたのち、社会は安定と平穩の時代を迎える。この新しい時代の文化を寛永文化と呼んでいる。元和偃武げんなえんぶという言葉通り、慶長二〇年・元和元年（一六一五）をもって戦争の

時代は終わり、徳川二六〇年の平和の時代がきた。元和年間より寛文年間（二六一五〜七二）くらいまでが広い意味で寛永文化の時代と考えられている。

寛永文化においては、かぶきのなデフォルメは影をひそめ、均衡がとれて華奢で裝飾性に富んだ優美さが喜ばれた。この美意識を当時は「きれい」という言葉で表現している。この時代を代表する茶人小堀遠州の美意識を「きれいさび」というのも、こうした時代の風潮の反映であった。

一七世紀中期を過ぎると幕藩体制は磐石のものとなった。二代將軍徳川秀忠、三代將軍家光の二代にわたって大名配置がめまぐるしく変わり、政治的重要拠点には親藩・譜代の大名が配され、外様大名が淘汰され、徳川幕府の大名統治が完成された。そのひずみは大名の改易にともなう大量の牢人の出現で、牢人が社会不安の種となることが、三代將軍家光の死を機に顕然化した。いわゆる慶安・承応の変である。これを機に幕府は武断主義より文治政治に転換したとされる。

茶の湯も、この時期の前半には桃山時代に頂点に達した芸能性と政治性を失い、後半には近世的な茶の湯を完成させたといえよう。

二 政治性の喪失と社会性の復活

利休七哲という言葉の初見は明らかでない。しかし七人の武将をもって利休の弟子を代表させる発想は、少なくとも寛永時代には成立していただろう。七人のメンバーは『江岑夏書』こうしんげがきに蒲生氏郷、高

待』，勁草書房，2012年)

筒井 紘一 (つつい ひろいち)

1940年生。早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。文学博士。今日庵文庫長・茶道資料館副館長・京都造形芸術大学教授

『懐石の研究—わび茶の食礼—』(淡交社，2002年)『茶書の研究—数寄風流の成立と展開—』(淡交社，2003年)『利休の逸話』(淡交社，2013年)

日向 進 (ひゅうが すすむ)

1947年生。京都工芸繊維大学大学院修士課程修了。京都工芸繊維大学名誉教授

『茶室に学ぶ 日本建築の粋』(淡交社，2002年)『近世京都の町・町家・町家大工』(思文閣出版，1998年)『物語ものの建築史 窓のはなし』(鹿島出版会，1988年)

典』, 淡交社, 2001年)「土屋相模守政直と茶の湯」(熊倉功夫編『茶人と茶の湯の研究』, 思文閣出版, 2003年)「土屋蔵帳とその歴史的意義」(吉成英文編『常陸の社会と文化』, ぺりかん社, 2007年)

堀内 國彦 (ほりのうち くにはひこ)

1943年生。京都大学理学部化学科卒業。無機化学専攻。京都大学員外研究員・研修員。

茶家堀内長生庵主。堀内宗完を襲名。表千家同門会理事。

共著に『京料理の歴史』(柴田書店, 1979年)『茶花づくし(炉編・風炉編)』(講談社, 2000年)編著に『茶道学大系・第8巻 茶の湯と科学』(淡交社, 2000年)『茶の湯の科学入門』(淡交社, 2002年)

※谷 端 昭 夫 (たにはた あきお)

1948年生。大谷大学大学院博士課程修了。文学博士。裏千家学園講師・湯木美術館理事・学芸部参与。

『茶の湯人物誌』(淡交社, 2012年)『日本史のなかの茶道』(淡交社, 2007年)『公家茶道の研究』(思文閣出版, 2005年)

山田 哲 也 (やまだ てつや)

1956年生。同志社大学大学院文化情報学研究科博士後期課程単位取得退学。裏千家学園講師

「浪華の茶匠初代宗鳳・青木凡鳥」(『茶人と茶の湯の研究』, 思文閣出版, 2003年)「喫茶の歴史」(『茶大百科』I, 農山漁村文化協会, 2008年)「千利休論——何が議論されてきたか」(『美術フォーラム21』第25号, 2012年)

佃 一 輝 (つくだ いっき)

1952生。一茶庵宗家。

『煎茶の旅 文人の足跡を訪ねて』(朝日カルチャーVブックス, 大阪書籍, 1985年)『おいしいお茶9つの秘伝 煎茶を愉しむ』(NHK出版, 2000年)

矢 野 環 (やの たまき)

1949年生。京都大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。同志社大学文化情報学部教授。

『君台観左右帳記の総合研究』(勉誠出版, 1999年)『名物茶入の物語』(淡交社, 2008年)「紹鷗所持名物道具の全容—天王寺屋宗伯所持道具とともに—」(『武野紹鷗 わびの創造』, 思文閣出版, 2009年)『『老葉』に対する系統的アプローチ—宗祇による連歌の系譜』(『文化系統学への招

執筆者紹介(掲載順/※印は本巻編集担当)

熊倉 功夫 (くまくら いさお)

1943年生。東京教育大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。静岡文化芸術大学学長

『茶の湯の歴史——利休以前』(朝日新聞社, 1990年)『寛永文化の研究』(吉川弘文館, 1988年)『近代茶道史の研究』(日本放送出版協会, 1980年)

八尾 嘉男 (やお よしお)

1973年生。佛教大学大学院博士課程単位取得。京都造形芸術大学通信教育部非常勤講師

「旗本茶人からみる近世前期武家の茶湯——多賀左近について——」(『藝能史研究』第184号, 2009年)「近世中期摂北地域の茶湯——その交流関係からうかがえる特徴——」(『鷹陵史学』第30号, 2004年)『茶譜』にみる寛永年間から寛文年間の京都の茶の湯」(『野村美術館紀要』第19号, 2010年)

原田 茂弘 (はらだ しげひろ)

1963年生。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得。表千家不審菴文庫主席研究員

「千利休の茶における人的構成」(『茶湯』第22号, 1989年)「江戸時代前期の千家の茶の湯における武野紹鷗」(『武野紹鷗 わびの創造』, 思文閣出版, 2009年)

中村 利則 (なかむら としり)

1946年生。京都工芸繊維大学工芸学部大学院修了。京都造形芸術大学教授

『町家の茶室』(淡交社, 1981年)『茶道学大系 6 茶室・露地』(編著, 淡交社, 2000年)「千利休論—異端の造形—」(『茶人と茶の湯の研究』, 思文閣出版, 2004年)

木塚久仁子 (きづか くにと)

1965年生。筑波大学第一学群人文学類(日本史)卒業。土浦市立博物館学芸員

『名物記三冊本』その構造と成立課程」(『茶道学大系第10巻 茶の古

こうぎ にほんちや ゆぜんし
講座 日本茶の湯全史 第2巻 近世

2014(平成26)年6月20日発行

定価：本体2,500円(税別)

編者 茶の湯文化学会

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印刷 亜細亜印刷株式会社
製本

Printed in Japan

ISBN978-4-7842-1697-0 C1076